

平成24年度香川大学大学院入学式 学長告辞

大学院、入学おめでとう。

諸君は、学士課程を終えて社会に巣立つ仲間たちと別れ、大学院生としてここで何年間か過ごされるわけですが、どうか有意義な研究生生活を送って下さい。

さて、大学院生として研究するということはどういう意味を持つのか、私の経験を踏まえてお話しします。

今振り返ってみて、私は研究生生活が一生で一番面白く、自由で輝いた時であったと思います。

私は、脳神経外科を専門としていましたが、研修を始めた約40年前の当時は、診療科が発足して日が浅く、研究を指導するエキスパートの先生がいない時代でした。仲間グループ討論をし、研究主題や方法論、実験結果について自由な議論がなされました。次々と新しいアイデアや実験方法を思いつき、時間の経つのを忘れ、深夜までわいわいやったものです。

特に記憶に残っているのは、抄読会で研究テーマに沿った外国論文を見つけてきて、その論文の内容について白熱した議論をしました。最初は論文に書かれている事を100%信用していましたが、研究が進み、次第に専門知識が深まってくると、論文を批判的、客観的に見る習慣ができ、その価値についても判断ができるようになりました。

研究するということは、自分の潜在的な能力と可能性を自由に伸ばすチャンスであるとともに、物事を客観的、批判的、科学的に見る視点を涵養してくれます。この素養は、私が臨床医になってから随分役に立ちました。将来、諸君が社会に巣立った時に、どの領域に進まれても、事象や結果を批判的、客観的に評価することは重要で、それができる人は、大きく飛躍する可能性を秘めていると思うの

です。

私は就寝時、枕元にメモを置いておき、ハッとした思いつきをすぐ記録していましたが、この習慣は研究のさらなる展開に大いに役立ちました。研究に行き詰まったときは、睡眠を十分に取り、脳をリラックスさせることです。湾岸戦争を指揮した元米国国務長官のパウエル氏も、“これはとてもどうにもならないと絶望的に見えたことも、一眠りしてから見るとさしたることでないことに気付く”と述べています。

次に、諸君に伝えたいことは、自分の仕事を記録にとどめる作業が非常に重要であるということです。すなわち、論文として世界にその評価を問う楽しみを味わって頂きたいのです。データの整理や論文を書くということは、自分の考えをまとめるのに役立つとともに、読者に理解してもらおう努力も必要です。特に、英文論文にまとめる作業は、かなりの時間と慣れが必要ですが、世界にその結果を問うのであれば、英文論文、それも質の高いジャーナルに発表する努力をして下さい。そうすれば、世界中から別冊送付の依頼がきたり、国際学会発表のチャンスがやってきます。

私は、このようにして世界中に研究仲間ができ、国際学会でも親しい友人ができました。中には生涯の心の友となった方もいます。諸君も研究生活をとおして、人生をより豊かに、そして彩りを添えて下さい。

ゴルフ発祥の地、スコットランドには“愚者は、まぐれあたりを自慢し、賢者はミスショットから多くを学ぶ”ということわざがあります。これから研究生活に入る諸君は、大いにミスショットをして、その中から普遍的な現象や“ひらめ

き”を感得して下さい。

それでは、諸君の成功を祈って、告辞とします。

平成24年4月4日

香川大学長 長尾省吾